

ファミリー・アンド・ヒストリー

〔第29回〕

音の記憶

✦ 文 岩本耕太郎 text by Kotaro Iwamoto ✦

人間の五感のなかで、味覚と聴覚は驚くべき記憶力を持っているように思われます。以前、味覚について書きましたが、今回は聴覚の記憶について個人的な体験から述べさせていただきます。

私は1959年生まれですが、小さいころに加山雄三さんの『お嫁においで』を歌っていた記憶があります。発売されたのは1966年なので、私はまだ7歳に満たない年でした。お嫁さんがどういう意味なのか分かりもしないのに、確かに8歳で引越す前の家での出来事であったのをはっきりと覚えています。

今でもお風呂に入って興に乗ると口ずさんだりすることがありますが、不思議なくらいそらで歌えてしまうのです。まあ大人になってから聞いたり、カラオケで歌うこともあったりしたので記憶が途絶えることがなかったのでしよう。

ところがもう一つさらに不思議な体験があります。

50歳を超えているいろいろなお付き合いの中で銀座のとある会員制のクラブに

行く機会がありました。そこは女性がお酌をするのではなく、立派なグラウンドピアノの伴奏でオペラ歌手がリクエストした曲を歌ってくれるというかなり高尚なお店でした。

お客さんの一番人気はブッチーニのオペラ、ジャンニ・スキッキのアリア「O Mio Babbino Caro (私のお父さん)」でした。何回か聞いていううちに私も大好きになり、いつしか「待ってました」と言うようになりました。

そんなある日、いつものようにオペラ歌手が歌いだしたのが『ある晴れた日に』という悲しいメロディーの曲でした。これもまたブッチーニの名作『蝶々夫人』のアリアです。初めて聴くはずなのにゾワゾワつと鳥肌が立ち、「この曲はどこかで聴いたことがある」と確信にも似た気持ちになったのです。

後日分かったのですが、私がボストンで暮らしていた3歳のときのことです。ボストンで『蝶々夫人』を公演することになり、ついでには本物の日本人の男の子をエキストラとして使いたいということから、私にその白羽の矢が

立ったのです。なので舞台上上で何度も聴いていたに違いありません。自身は全く記憶に残っていませんが、母親が事の顛末を教えてくださいました。人間には視覚優位の人と聴覚優位の人がいるそうです。私の場合は視覚ではすっかり忘れてしまったこの体験を聴覚で記憶していたのだと思います。



profile

帝国クリニック院長

1959年生まれ。幼少期をボストンで過ごす。

山形大学医学部卒。米国イリノイ州立大学で分子生物学を研究、1993年より現職。

サーフィンとクラシックカーをこよなく愛し、4世代7人家族。

著書に『患者さまが増える』(H&I出版)、『エグゼクティブが実践するたった一つの健康法』(中経出版)